

## 「我らと共に働く主」 マルコによる福音書16章14-18節

森島 牧人 牧師

今日の聖書は、十一弟子が失意の食卓についているところへ、復活された主イエスが現れるところから始まります。「その後、十一人が食事をしているとき、イエスが現れ、その不信仰とかたくなな心をおとがめになった。復活された主イエスを見た人々の言うことを、信じなかったからである。」(マルコ16:14)とあるように、彼らの前に現れた主イエスは開口一番、不信仰とかたくなな心を指摘して、彼らを非難されます。ところがどうしたことか主は、その厳しい叱責の言葉と同時に、「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」(同16:15)と言われたと聖書は伝えているのです。

このマルコによる福音書が書かれ読まれたのは、原始キリスト教会という主イエスの弟子たちの群れ・共同体に於いてで、この共同体を一つの群れとした「印」は、「主イエスは復活し給う」という言葉でした。弟子たちの小さな群れは、この言葉によって形成され、復活信仰を告白する共同体として生き抜いて行ったのです。主の捕縛の際に逃げ去り、墓にも行かず、主の復活の証言にも耳を貸さなかった十一人の弟子によって生み出された主の復活を告白する教会・・・この不思議を説明するために、この結びはマルコの結末に続けて書き加えられたと思われるのです。パウロは「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、私たち救われる者には神の力です。」(Iコリント1-18)と強い調子で明確に語っています。人間が救われるために、十字架の出来事の重要な意味は、言葉化されなければならなかったのです。

復活の証言を無視した十一弟子の食卓に現れ、叱責と同時に福音宣教を命じられた主イエスは、この時、使命と共に彼らに神の力を与えるという約束をされたのでした。この「神の力」がどういうものであったか、それは次回ということになりますが、何とも味わい深いのは、主イエスは、私たちが生きて行く道の途上、生きるために体を保とうとする食卓の場に現れ、私たちに語りかけられるということです。エマオへの荒涼たる道の途上に、希望を失った弟子たちが硬いパンを裂く食卓の場に、復活の主は現れたのでした。

ここで大切なことは、主の近くで常に行動を共にして来た十一弟子全員が、不信仰であったという事実です。これは、人間は本質的に不信仰で、心はかたくなであることを明らかにしています。しかしそのような者たちをも神は用いて、御子の復活の証人として立てられる・・・と。それはすべて、神のみ恵によるもの以外の何ものでもありません。

パウロは「信じたことのない方を、どうして呼び求められよう。また、宣べ伝える人がなければ、どうして聞くことができよう。」と、復活の証言として聖書の言葉が語られることの重要性を、説いています。

弟子たちの不信仰を強い言葉で非難された主が、突如として彼らに派遣を命じられる、この理屈に遭わないところに「メシア」の秘密があるのです。そこにある秘密とは、とがめられるべき弟子たちや私たちが、決して見捨てたり滅ぼしたりしないという神の決意表明です。さらに、そのような弟子たちや私たちが、御業のためにお用いになるという神の約束の表明です。

ローマ書5:20にパウロは「罪が増したところには、恵はなおいっそう満ちあふれました。」と書いています。不信仰でかたくなな私たちが立っている所、その場所こそ、私たちが神の恵を受ける場所なのです。神の決意の言葉に感謝するばかりです。